

やまとの名品

天理図書館

森島中良先生著

紅毛雜話

全部 五冊

此書ハ紅毛人の物類並に其の國の四はゆる齊濟まされ蘭書に載る後漢と
名したる體筆を其の會款草本魚鳥の圖說並物類の中西漢エシキテ
水機関飛行船木の圖云々あり其の未嘗有の海書を其の藝に立寄る招
牌と認て顧たまし天明下木の秋

こうもうぎつわ
紅毛雜話

もりしまちゅうりやう
森島中良著

天明7年(1787)序刊 5冊

縦22cm 横15.7cm

徳川開府以来の鎖国政策より百年あまり、十八世紀初には国内の生産力は向上し、商業も急速な発達を見せていた。伝統的な科学技術分野でも一層の進歩が求められる中、八代將軍徳川

吉宗は、実用的な科学技術を求めて西洋の知識の享受を奨励する。以降、日本の眼は西洋に向けられ、医学、本草、天文学など多岐に亘る分野でその理解と吸収に努めた。

掲出は、蘭学者であった中良の兄で幕府奥医師の桂川甫周国瑞が江戸参府のオランダ人から見聞した西洋事情や、桂川家に集う学者の話題となった海外の事柄などを、後になって中良が

編纂したもので、蘭学草創期の海外知識の啓蒙書である。飛行船の図や顕微鏡で見た虫の拡大図など、多くの図版と平易な文章で解説され、人々の知的要求に応えている。

卷之二の挿絵「靈鷲山絶頂之図」(図一)は、ファレンティン『新旧東インド誌』(一七二六年刊)に収められた、Adams Berg、(アダムス山) 図(図二)の山頂を描いたもので、日本における銅版画の創始者司馬江漢の作。

天理図書館が所蔵している『新旧東インド誌』は、長崎でオランダ語の通訳を勤めた吉雄耕牛旧蔵のもの。江漢が長崎の耕牛宅を訪問していること、耕牛旧蔵

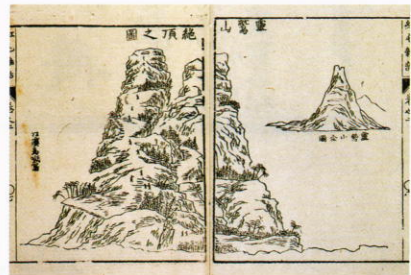


図1



図2

書の挿図中、アダムス山図のみが彩色であることから彼が直接手にしていたものかもしれない。

(天理図書館 徳島照代)